

ねやがわスタンダード（ver.6）

～学習習慣の定着と生徒指導観の共有に向けて～

寝屋川市教育委員会

ねやがわスタンダード研究部

寝屋川市の目指す子ども像

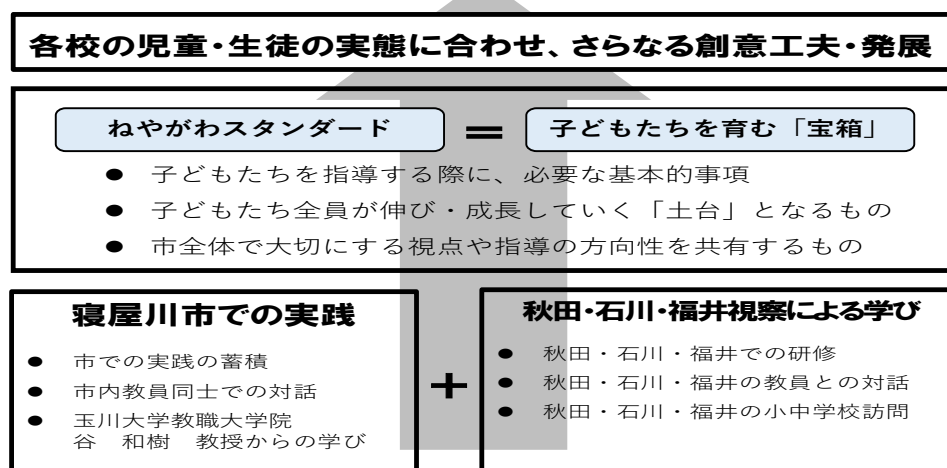
「考える力を身に付けた たくましく生き抜く子」

寝屋川が目指す教育のイメージ図

考える力を身に付けた たくましく生き抜く子



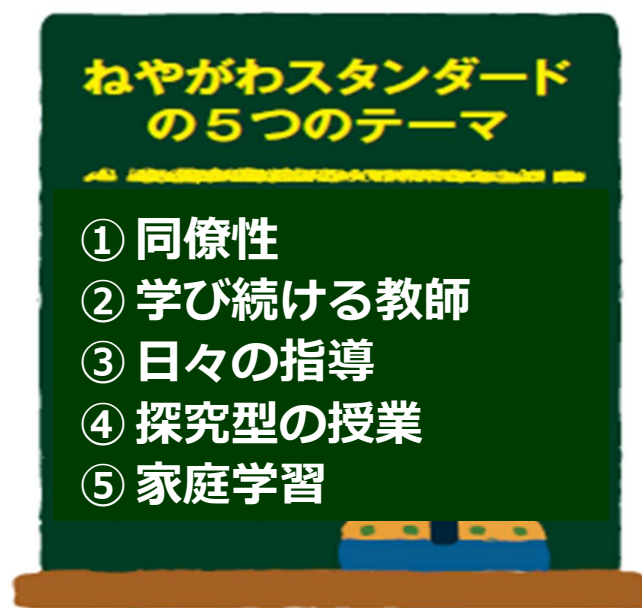
ねやがわスタンダードとは・・・



※ 単に画一的な指導となることがないように、本冊子を土台とし、基本的な事項を確認しながら、教職員が対話を通じて重点項目等を定め、取組を推進してください。

「チーム寝屋川」

ねやがわスタンダード5つのテーマ



寝屋川の教職員で共有したい教師像

令和元年度・4年度に秋田県へ、5年度に石川県へ、6年度に福井県へ訪問した先生方とともに、改めて寝屋川市の教師として、共有したいことを協議・整理しました。

- ☐ 今だけでなく、10年後、20年後を想像して、子どもたちと向き合う教師
- ☐ 子どもたちの良さや可能性を引き出す教師
- ☐ 同僚とのコミュニケーションを大切にする教師
- ☐ 子どもたちのロールモデルとなる主体的に学び続ける教師
- ☐ 様々な取組の目的や意図を理解し、常に改善する意識を持ち続ける教師

ねやがわスタンダードの効果的な活用場面（例）

① 校内研修・校内研究と関連付けて

校内研修・校内研究の視点として重点的に推進する項目を定めることで、「寝屋川教育」との関連をイメージしながら、さらに学校の実態に合わせた発展的な取組を考えることができます。

② 教職員の相互授業参観の視点として

授業参観の際に共通の視点を持つことで、授業後の協議を活性化することができます。

③ 小中一貫教育の観点として

校区の会議等で活用することで、指導で大切にしている視点を共有できます。

④ 授業プロセスのセルフチェックとして

自身の指導や授業の在り方等を確認する機会にできます。

⑤ OJTのポイントとして

OJTの際に用いることで、指導技術について共通した視点で学ぶことができるとともに、指導者側のスキルアップにもつながります。

⑥ 初任者指導の内容として

校内での初任者指導を行う際に活用することで、指導の基本的事項を理解することができます。

⑦ 転任者との共有資料として

年度当初に転任者と指導方法等について確認することで、学校として統一した方向性のもと子どもたちと向き合うことができます。

ねやがわスタンダードを各学校の実態や取組に落とし込んで、計画的に推進していくことで、より効果的なものとしてください。



「ねやがわスタンダード」が、経験年数の浅い先生たちの手助けになってほしい。

「ねやがわスタンダード」が、ベテランの先生たちの立ち返るものとなってほしい。

「ねやがわスタンダード」が、市内の全ての先生たちをつなげるためのものとなってほしい。

「ねやがわスタンダード」は、私たちが「チーム寝屋川」として子どもたちと向き合うためのものです。

これからの社会が、どんなに変化して予測困難になっても、

自ら課題を見だし、考え、解決しようと向かっていけるように。

子どもたちの小学校、中学校時代が幸せて、

卒業後も、なりたい自分に向かっていけるように。

市内全教職員・管理職・教育委員会が

ともにすすんでいくためのものが「ねやがわスタンダード」です。



目次

第1章 すべての基盤となる「同僚性」

- 1 同僚性とは・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・4
- 2 同僚性を高めるために・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・4
- 3 市内全教職員がつながるための「共通言語」＝「ねやがわスタンダード」・・・・・・・・・・・・・6

第2章 学び続ける教師

- 1 「新たな教師の学びの姿」とは・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・7
- 2 「教師の学び」の転換・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・7
- 3 「教師の学び」のデザイン・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・8
- 4 教師の主体的に学び続ける姿勢・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・9

第3章 「日々の指導」

- 1 子どもたちに寄り添った指導・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・11
- 2 どの教室でも方向性を揃えた指導
(1) 基本的な生活習慣の指導を大切にしましょう・・・・・・・・・・・・・11
(2) 指導のルールやレイアウトを共有しましょう・・・・・・・・・・・・・12
(3) 掲示の工夫で、教室全体をあたたかい雰囲気へ・・・・・・・・・・・・・13

第4章 「探究型」の「ねやがわ授業スタイル」

- 1 子ども主体の授業への転換・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・14
- 2 学習の流れに関する指導のポイント・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・16
- 3 授業を充実させるポイント
(1) 熱中する授業を作りましょう・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・20
(2) 時間感覚を大切にしましょう・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・21
(3) 発問を工夫しましょう・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・21
(4) 間違いを楽しみ、「深い学び」が生まれる教室にしましょう・・・・・・・・・・・・・23
(5) 熱心な話し合い・学び合いでお互いに高め合う授業を作りましょう・・・・・・24
(6) タイムリーな助言で子どもを支援しましょう・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・25
(7) がんばった道筋が見える板書にしましょう・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・27
(8) 丁寧なノート指導をしましょう・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・30
(9) 意図的な机間指導をしましょう・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・32

第5章 「家庭学習」で個別最適な学びの実現

- 1 家庭学習ノートの意義・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・34
- 2 家庭学習ノートの取組・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・35

巻末資料

- 寝屋川市ユニバーサルデザインの授業づくりシート
- 幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿
- ねやがわスタンダード セルフチェックシート

第1章

すべての基盤となる「同僚性」

1 同僚性とは・・・

★ 同僚性って何・・・？

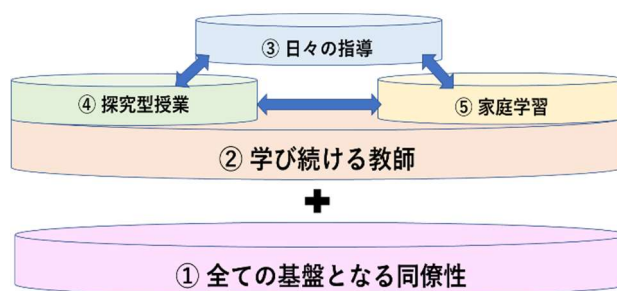
教職員同士が単に仲が良いだけでなく、

互いに支え合い、互いの専門性を高め合う、協働的な関係



★ なぜ同僚性が大切・・・？

組織的かつ効果的に教育活動を行うためには、教職員同士が互いに支え合い、互いの専門性を高め合う同僚性が基盤となります。また、様々な立場の教職員がチーム学校として機能するためには、職場の組織風土（雰囲気）が大切です。言い換えれば、担任等が一人で抱え込むことなく、学校全体として連携・協働型の指導へと転換していく際に重要となるのは、職場の人間関係の有り様です。



同僚性が高まることで、教職員一人一人が学校全体の課題や取組について、これまで以上に自分事としてとらえることができ、互いにつながり、語り合う中で、実践が充実していきます。



**自校や寝屋川市の実践を、
全ての先生が、いきいきと、
自分の言葉で語ることができる**

2 同僚性を高めるために

現在、グローバル化や情報化、少子高齢化など社会の急激な変化に伴い、学校現場も、様々な課題に直面しています。例えば、主体的・対話的で深い学びの視点からの授業改善、いじめ・不登校への対応、ICTの効果的な活用、働き方改革等です。これらの課題に向き合っていくためには、それぞれの取組を充実させるだけでなく、それらの土台となる「同僚性（支え合い、互いの専門性を高め合う）」を、これまで以上に高めていく必要があります。

寝屋川市では、「同僚性」を「ねやがわスタンダード」のテーマのひとつとし、「どのようにすれば同

僚性が高まるのか」研究を進めてきました。これまでの市内の実践や視察における対話の中で、いくつかの「気づき」がありました。

同僚性を高めるためのポイント

～これまでの寝屋川市の実践と、秋田・石川・福井視察を通した気づき～

① 「そもそも何のため」「学校教育目標」へ、みんなで立ち返る

様々な取組を進める中で、時々立ち止まって、みんなで「そもそも何のため?」「どこに向かっている?」をキーワードに、学校教育目標や目指す子ども像に立ち返ることが、同僚性の高まりにもつながります。

② 対話と内省

様々な場面で、教職員同士の対話を促す工夫をすることが、同僚性の高まりにつながります。市内でも、教育書コーナーの設置、板書写真の共有、学級通信の交換等、様々な取組がなされています。

③ とともに学び続ける

校内研修、校内研究、相互授業参観、研修資料の共有等の「ねやがわスタンダード『学び続ける教師』（第2章）」の取組がきっかけとなり、教職員同士の関わりや対話が生まれ、それらが同僚性の高まりにつながります。同僚性とは「互いの専門性を高め合うこと」でもあります。「学び続ける教師」であることと、「同僚性」は相互に作用しあう車の両輪です。

④ チームワークの強化

学年や教科を横断した取組の充実、ペアティーチング・コーチングの導入など、校内で多様な関わりが生まれるよう工夫することで、同僚性の高まりにつながります。

⑤ とともに振り返る

取組を進める中では、うまくいったり、いかなかったり、様々な状況が生まれます。そんな時、ふと立ち止まって、みんなでともに振り返ることで、様々な視点から現在地を確認することができます。「進んでいないようで、ちゃんと進んでいたこと」「成長していたこと」など、現在地を確認することは、次へ進むための支えになります。

⑥ とともに子どもの成長を喜ぶ

教職員同士が日常的に子どもについて話をしたり、意見を交わしたりする中で、ともに子どもの成長を喜んだり、ともに悩んだり…。そんな風に、校内全教職員で子どもについて語り合い、ともに子どもの成長を感じることは、同僚性の高まりにもつながります。

同僚性を高めるためのポイント

～これまでの寝屋川市の実践と秋田・石川・福井視察を通した気づき～

⑦ メンタルヘルスサポートの強化

子どもたちと向き合う中で、メンタルヘルスの維持は重要です。教師は対人援助職であるため、必ずしも決まった正解がない事例が多く、加えて、目に見える成果を実感しづらい場面も多くあります。それゆえ自分の行動が適切かどうかの迷いや、不安を抱きながら対応していることもあります。

「自分の不安や困り感を同僚に開示できない。」「素直に助けてほしいと言えない。」「努力しているのに解決の糸口が見つからない。」「自己の実践に自信が持てない。」等により強い不安感、焦燥感、閉塞感、孤立感を抱き、心理的ストレスが高い状態が継続することがあります。そうした中で、メンタルヘルスサポートを強化することが、受容的・支持的・相互扶助的な同僚性の高まりにつながります。

また、自分の心理状態を振り返る、セルフ・モニタリングも重要です。

★ 短時間でも、常に子どもの情報を共有し、子ども理解を深めましょう。

子どもの様子について、様々な立場の教職員が日常的に共有することで、子どもへの一貫した指導につながります。

- 「〇〇さんは、今日の国語の時間にとても良い発言をしていましたよ。」
- 「〇〇さんは、今日そうじを頑張っていましたよ。」
- 「〇〇さんは、最近部活動でリーダーシップを発揮してくれていますよ。」
- 「〇〇さんは、日曜日の少年野球で優勝したらしいですよ。」
- 「〇〇さんは、今日少し元気がなかったけど、どうしたのかな？」 etc.



日常的に子どもの情報を共有しましょう！

3 市内全教職員がつながるための「共通言語」＝「ねやがわスタンダード」

校種がちがっても、勤務校が違っても、取組がちがっても、それらを貫く「共通言語」としての、「ねやがわスタンダード」の理念・視点があるからこそ、対話が成立し、それぞれが自分ごととしてとらえ、新たな気づきが生まれます。そして、それらは市内全教職員の同僚性が高まりにつながります。

第2章

学び続ける教師

〈主体的に学び続ける教師の姿は、子どもたちのロールモデル〉

1 「新たな教師の学びの姿」とは・・・

「子どもたちがどう学ぶのか」「子どもたちにどう教える（支援する）のか」ということを突き詰めて考えていけば、おのずと教師自身の学びについて、問い直すことになります。このように考えていくと、「教師の学びの姿」は、「子どもの学び」の相似形であるといえます。つまり、児童生徒の学びのみならず、教師の学びも、個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実を通じて、「主体的・対話的で深い学び」を実現する必要があります。



【引用】「研修観の転換」に向けた NITS からの提案. (独) 教職員支援機構, 2024.

2 「教師の学び」の転換

これまで、子どもたちの学びについては、学習指導要領をはじめ様々な文書を通じて、一定の共通理解がなされてきました。一方、「教師の学び」については、あまり検討されずになされてきた状況にあります。改めて、教職員を「主語」にした「教師の学び」の在り方について考えていく必要があります。

先生方は、実践を重ねる中で、子どもと関わり、同僚や保護者等と交流し、先輩教員から助言や指導を受け、経験を振り返り、新たな知識や技能を得たりします。これらを通して、判断力を高め、教職の技に習熟し、子ども観、学習観などを形成していきます。

そうした実践、実践の省察、自己研鑽の中で、「探究心を持ちつつ自律的に学ぶ」教職員の力量形成・深化の過程が、より豊かなものになるよう、支援するものが「教師の学び」のキーワードであると考えた場合、どのような「教師の学び方」が考えられるでしょうか。



【引用】「研修観の転換」に向けた NITS からの提案. (独) 教職員支援機構, 2024.

3 「教師の学び」のデザイン

校内で「教師の学び」を考える際には、前例踏襲的に企画・実施するのではなく、どういったことを学びたいかの要請を踏まえつつ、学び手たる教職員を「主語」として考えていきましょう。その際に、「先生たちに、どのような気付きや変化があるか」「先生たちは、何について学ぶか」「先生たちは、どのように学ぶか」の3つの観点から考えてみてください。

★ 「教師の学び」の3つの要素

「教師の学び」には、①知識やスキルについて、新しく知る ②自らの教育実践の特徴や考えの枠組みについて、気付きがある ③自己の「在り方」について、気づきがある（深まる）の3つがあります。これら3つの要素をもとに、校内での学びを整理し、取組を進めてみましょう。

★ 教職員を「主語」にした「学び」について

校内で「教師の学び」について考える際に、「新しい知識やスキルについて知り、慣れる」という形にするものも一定程度必要ですが、多くの場合の研修で扱われる知識やスキルは、それまでの教職経験中で何かしら触れたことがある場合がほとんどです。「自身の教職経験と関連付けながら知識やスキルについて知り、参加者の中に豊かな気付きが生まれる」ことを意識することで、自分事としてとらえ、自身の実践へと発展させることのできる深い学びへとつながります。

★ 豊かな気づきが醸成される「教師の学びの場」をデザインするために

キーワード

- ◆内省
- ◆対話
- ◆教材の工夫

全ての先生方は、その力量形成のほとんどを日々の実践の中で試行錯誤しながら行っています。そうした力量形成の過程を、より豊かなものにするものとして、「教師の学び」をとらえ、考えていくことが大切です。

4 教師の主体的に学び続ける姿勢

いわゆる「授業がうまいとされる教師」は、日々の実践の中での内省や同僚との対話を繰り返しながら、力をつけていきます。そのための一つのきっかけが、相互授業参観です。教職員同士が互いに授業を見合い、多くの指導を受ける機会を得ることは、教師の力量形成にとってとても重要です。ただ、経験年数を重ねるだけでは、指導力を付けるのは難しいことです。継続的な学びを進める上で必要となるものは、探究心を持ちつつ自律的に学ぶという主体的な姿勢です。

★ 指導力向上に向け、授業を観てもらったり、観せてもらったりしましょう。

① 緊張感のある場面（研究授業）を何度も通過する経験

→例えば、簡単な略案を書いて授業をたくさんの人に観てもらおう。

② 同僚に授業を観てもらおう経験

→可能であれば代案を示してもらったり、実演してもらったりする。

③ 同僚の授業を観に行く経験

→参観した授業に関しては、必ず感想等を伝え、お互いに学び合う。

- 「発問の善し悪しは、子どもの顔ですぐ分かるよ。発問したあとの子どもの表情をよく見てごらん。」
- 「あの場面では、子どもに『なぜ』と問いかけたほうがよかったと思うよ。自分で課題を発見させるよいチャンスだったんだ。」



このような、豊富な実践や経験に基づいた的確なアドバイスを共有し、次世代に伝えていくためにも、学び合う教師集団であることが大切です。



**共有と伝承を！同僚からのアドバイスを大切にしましょう！
ねやがわスタンダードの視点で話すと、より深まりやすいです！**

★ 学びの様子を可視化したり、互いに共有したりしましょう

学びの様子を可視化することで、自分自身の現状を把握・振り返ることができ、目的意識をもって次の学びへ向かうことができます。また、互いの学びの様子を共有することで、さらに深い学びへとつながります。

【例】

- 巻末のセルフチェックシートを使って、自身の強みや課題を明確にすることで、スキルアップへとつながります。
- 受講した研修の資料等を共有したり、校内で伝達研修を行ったりすることで、学びが広がります。 etc.

★ 先生のがんばる姿は、必ず子どもの心に届きます

先生にも、できないことや不得意なこともあります。しかし、それらを克服するためにがんばる姿を見た子どもたちは、きっとこう思うでしょう。「さすが、先生！」と。

そして、「さすが、先生！」と言わせる場面を披露し合い、磨き合うことで「さすが、わたしたちの学校の先生！」となるのです。

★ 時には自分のことを第三者の視点から見てみましょう

自分の授業をビデオに撮り、表情、くせ、言葉遣い、口調、話すスピード、板書、立ち位置などをチェックしてみましょう。自分では気づいていない発見ができます。同僚からの助言も参考にして、改善していきましょう。



「教師の学び」も、
個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実を通じた、
「主体的・対話的で深い学び」を！

第3章

「日々の指導」

〈子どもたちが安心して授業に向かうために〉

1 子どもたちに寄り添った指導

★ 教師のあたたかな笑顔、豊かな表情は、子どもの思考を柔軟にします

褒める・認める・励ます・自分で決定させることで、自信や自己肯定感を育みましょう。

- 肯定的評価を大切に！

「よく、考えたね。」「いい考え方だね。」

- 子どもの考えに感動すること！

「さすが!」「すごい!」「素晴らしい!」

- 子どもは、教師の表情をよく見えています！

笑顔で始まり、笑顔で終わる授業を。



- 子どもたちとコミュニケーションをとるための手だては、いくつありますか。
- 今日、何人の子どもたちとコミュニケーションをとりましたか。
- 日々の生活の中で、子どもの様子を教職員どうして話していますか。
- 授業中の教室に入った時、立ち歩いている子どもがいました。どう声かけしますか。

★ 子どもの考えに寄り添うことを指導の基本にしましょう

必要に応じて、毅然とした指導することも大切です。その際にも、子どもたちが自分は先生から大切にされていることを感じられるよう、心がけましょう。

2 どの教室でも方向性を揃えた指導

(1) 基本的な生活習慣を大切にしましょう～挨拶・返事・靴揃え～

★ 授業は、日々の基本的な生活指導と関連しています

気持ちのいい挨拶、はっきりとした返事、きちんと靴がそろった下足箱。当たり前のことを当たり前にできるよう指導することが、授業改善にもつながっていきます。

① **挨拶**：人と人とのコミュニケーションにとって必要不可欠なものです。

挨拶がきちんとできる子に育てることは、子どもの将来を見据えた大切な指導です。（「いただきます」や「ありがとう」等も含みます。）



就学前

就学前教育でも、日頃から友達同士や教師に挨拶ができるように意識づけをしています！

② **返事**：「はい」という返事は、「相手の言っていることが理解できた」

「しっかり聞きとれた」「承諾した」という合図です。返事ができるということは、主体性を持ち相手の話をきちんと聞ける姿勢ができていているということです。

③ **靴揃え**：細かな部分へ気が向けば、さらにいろいろなことが見えてきます。

自分の身の回りを整える習慣は、丁寧な生活につながります。また、日々の指導を丁寧に行っていれば、子どもたちのちょっとした変化にも敏感に気づくことができます。



就学前

就学前教育でも、ビニールテープで線を引き、靴もそろえられるよう意識づけています！



★ **日常の指導は「やわらかく、自然な形で」行いましょう。**

日常の指導については、一度に、短い時間で厳しく指導するのではなく、時間をかけて、少しずつ、かつ粘り強く取り組ませることで、自然な形で子どもたちを向上させていくことが望ましいです。

例えば、音読の合間に、「本を両手で持っていますか。」「もうちょっと背筋をまっすぐ伸ばしてごらん。」等、優しく穏やかな声で具体的な指導をしたり、できているところを認めたりすることで、確実に改善します。

（２） 指導のルールやレイアウトを共有しましょう

★ **教師が変わっても子どもたちが不安にならないよう、指導の方向性を共有しよう。**

同じ方向性で指導することが、子どもの安心感、保護者・地域からの信頼、落ち着いた学習環境、授業改善につながります。「同じ視点で指導することで、対話が深まる」「進級・クラス替えがあっても4月の最初から、授業がスムーズに始められる」「経験年数にかかわらず、子ども主体の授業が行える」ことが大切です。（教室環境、整理整頓の仕方等についても共有しましょう。）

そろえるべきところをそろえた上で、各教師が工夫をすることが大切です！



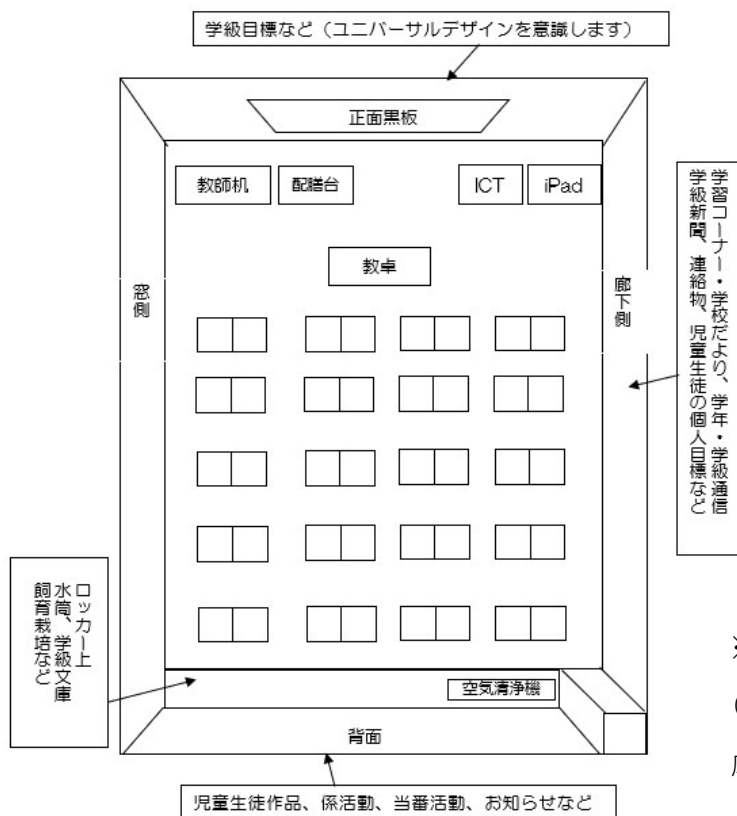
point



就学前教育でも、校区小学校と共通の掲示物を使って、進学への期待を持たせると共に、円滑な接続へ取り組んでいます！



【教室レイアウト（例）】



※ ここに示しているものは、（例）ですので、各校の実態に応じて調整してください。

（３） 掲示の工夫で、教室全体をあたたかい雰囲気へ

★ 掲示を通して互いをよりよく知り、楽しい学校生活が送れるよう、掲示の目的や方法を教職員で共有しましょう。



【掲示の基本的な考え方】

- 子どもを主体とした意図的な掲示をしましょう
- 掲示を通して、互いのがんばりや成長をよりよく知る機会としましょう。
- 掲示物が単なる飾りとならないよう、定期的に更新しましょう。

※ 教室前面の掲示物は、子どもにとって多くの情報となりすぎないようにしましょう。

※ 子どもの作品を掲示する際は、比較・競争につながらないように配慮しましょう。

第4章

探究型の「ねやがわ授業スタイル」

〈子どもたちの主体的な学びに向けて〉

1 「考える力」を育む子ども主体の授業への転換

★ 授業づくりの方針を、全ての先生で共有し、みんなで同じ方向を向いて取り組むことで、改善の視点が明確になります。

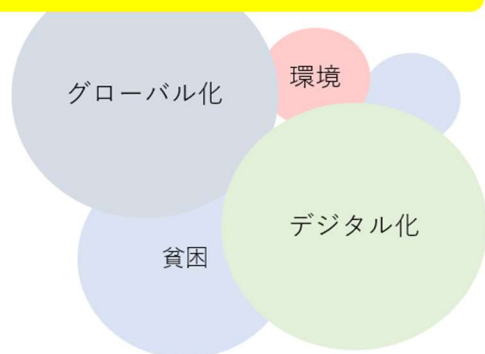
課題解決のための探究型授業を基本形として「授業づくり」をしましょう。学習指導要領が求めている「新しい時代に求められる資質・能力」を、「教え込む・練習する」ことで知識を定着させる「教師主導の知識注入型授業」だけで育てることは困難です。

「教師主導の授業観」から「子ども主体の授業観」に意識を変え、授業を組み立てましょう。また、「一人一台端末」を効果的に活用し、子どもたちの学びを深めましょう。

★ なぜ探究型授業をする？

複雑化した社会

予測困難な時代



「課題を見いだし」

「考え」

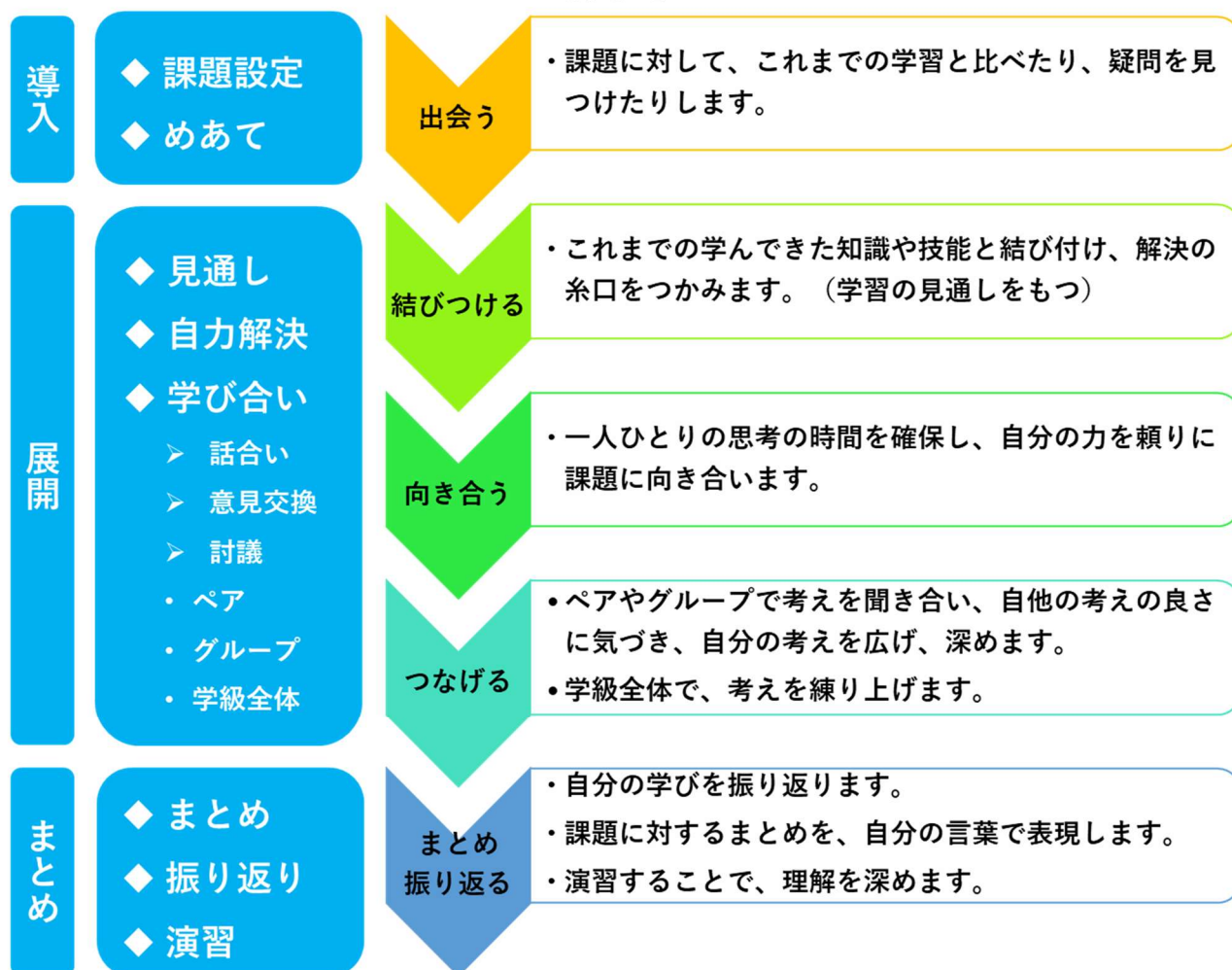
「解決しようとする」

コロナ禍を経て、社会は急速に変化しています。1人1台端末の運用も始まり、単なる知識であれば、インターネットで検索をすれば、すぐ答えが見つかるようになりました。一方で、現在の社会は、環境、差別、高齢化、経済格差などの様々な課題が複雑に絡み合っています。

こうした決まった一つの答えがない状況において、自ら「課題を見いだし」「考え」「解決しようとする」力が求められています。そのための手立てとなるのが探究型授業です。

寝屋川市のこれまでの実践と秋田・石川視察からの学びを市内教職員・管理職・市教育委員会で協議し、整理した物が探究型の「ねやがわ授業スタイル」です。

ねやがわ授業スタイル



※ 振り返りの内容は、次回の授業の最初に紹介するなどし、子どもたちの学びに向かう意欲の向上につなげましょう！



基本プロセスをベースとして、【教科の特性】や【子どもたちの思考の流れ】に沿って臨機応変に展開を工夫することが大切です。必ずしも毎時間たどるのではなく、学習単位で実施しましょう。

2 学習の流れに関する指導のポイント

導入

出合う：課題の提示・めあての設定

★ 課題・めあてを与えるだけでなく、子どもの興味・関心が高まる導入を工夫し、子どもが自らつかむようにしましょう。

単元のゴールを意識させ、そのゴールに向けて本時では「何ができればいいのか」「何が分かればいいのか」を子どもに意識させます。それを通して、「～について考えよう」「なぜ～なのか知りたい」といった問いを子どもから引き出しましょう。

ポイントは、矛盾のある問題、既習と未習事項が混じる問題、困惑する問題、煩雑さのある問題、生活にある身近な問題等を意識することです。

T：「前時、〇〇について学習しましたね。

～するには、次に何について考えればいいでしょう。」

S：「～について、考えてみよう！」

S：「なぜ、～なのかを考えてみたい！」



★ 付けたい力（教科としての目標）を明確にし、授業のビジョンを持ちましょう。

学習活動を通して、どのような力を付けるのかというビジョンを教師が持つと同時に、子どもも「そのビジョン」を持つことができるようにしましょう。そして、そのビジョンをもとに子どもから引き出した「課題」や「問い」を「めあて・課題」として示しましょう。



T：この授業で、〇〇ができるようにしたい。

S：この授業で、〇〇ができるようになりたい。

課題の提示・めあての設定は、必ずしも授業冒頭で提示しなくてもはいけないわけではありません。授業内容に応じて、提示するタイミングを考慮しましょう。



★ 「問題」・「課題」・「めあて」の意味を意識して授業をつくりましょう。

「問題」

本時のねらいを達成するために、教師が与えるもの。課題を引き出すために提示するもの。

【例】マッチ棒で長方形を作ります。横は縦より1本だけ増やします。全部で何本のマッチ棒が必要でしょうか。

「課題」

問題に出合い、解決しようとした際に子どもたちから生まれる疑問。

【例】縦が何本の時でも、全部の本数を簡単に求めることはできないでしょうか。

「めあて」

本時の学習を通して、達成したい目標や目指す姿

【例】縦が何本の時でも、全部の本数を簡単に求める方法を考えよう。



ICT

資料の配付や、動画や画像による視覚的な導入に効果的！

※ 発達段階や場面によって、紙による資料の方がわかりやすいこともあるので、留意しましょう！

展開

結びつける：見通しを持つ

★ 一人一人の考えを引き出せるような、教材提示や発問の工夫をしましょう。

子どもの思考を予想し、既習事項をもとに子どもが自ら気づいたり、考えたりできるような教材や発問を工夫しましょう。また、考えを持ってない子どもの姿を想定し、補助発問を考えたり、ヒントカードを用意したりするなどの、個別の支援策も立てておきましょう。

S：この資料がヒントになって、こんなことに気づいた！

S：（補助発問を聞いて）そういう風に考えればいいんだ！



向き合う：解決活動【自力解決】

★ 一人一人が自分の考えを書く時間を確保しましょう。

書くことは、自分の思考を確かなものにします。一人一人が自分の考えを文章、図、式などを用いて書く時間を確保するようにしましょう。この時、考えの根拠を明確にして書くことを繰り返し指導することが大切です。



S：「わたしは、このように考えました。
理由は〇〇だからです。」



情報収集で活用 ※学習内容に応じて、本や辞書と使い分けよう！

つなげる解決活動【学び合い】

★ 言語活動の充実を図りましょう。

ペアやグループ、学級全体で友だちと、考えを交流・共有し、自分の考えを広げたり深めたりする活動を、積極的に位置づけましょう。



一斉授業だけでなく

- ★ ペアや班で意見を交換する。
- ★ iPad やホワイトボードを使って話し合う。
- ★ 付箋を使って話し合う。

★ 「何のために」「どのような手順で」対話するのかを、子どもが明確に意識できるようにしましょう。

教師にやらされる話し合いではなく、子どもにとって聞きたいと思える対話の場になるように、対話の目的と手順を示しましょう。

S：友だちの考えをもっと聞きたいな。
S：いい考えがあったら、取り入れたいな。
S：司会者と記録者などの役割を決めた方がいいよ。
S：〇〇さんの考えは、なるほどと思ったので、自分の考えに付け足してメモしよう！



意見・ノートの交流や説明で活用 ※一人一人が、話したり、発表したりする機会も大切に！

終末

まとめる・振り返る・演習する

★ 課題に対するまとめを、めあてに対する振り返りを、子どもの言葉で整理しましょう。

めあてについて、本時で学んだことを、教師が一方的にまとめるのではなく、子どもから引き出して、子どもの言葉で整理していきましょう。



「課題」と「まとめ」、「めあて」と「振り返り」は、対応していることが大切です！

新聞づくりやスライドづくりで活用 ※学習内容に応じて、本や辞書と使い分けよう！
記録を残して、次の授業へつなげよう ※手書きの場面も大切に！



★ 次の学びにつながる振り返りにしましょう。

個々の気付きや、考えたこと、新たな疑問を「友だちに説明しましょう。」「ノートに2～3文で書きましょう。」と投げかけ、自分の学びを振り返ることができるようにしましょう。それが一人一人の学びの深まりとなり、次の学びへの意欲につながっていきます。

また、1単位時間や単元の終わりだけでなく、内容のまとまりごとにも振り返る機会を設けるなど、意図をもって行いましょう。

【振り返りの視点】

- ① 今日のめあてが達成できたか
- ② 今日の学習で学んだこと
- ③ 友だちの考えでよくわかったところ（発表など）
- ④ 自分の学習の取り組み方
- ⑤ 新しく出てきた疑問
- ⑥ 今日の学習を通して、自分が成長したと思ったこと
- ⑦ 次の時間への意欲



など、感じたことや思ったことを、文章で書いたり、話したりする。

評価

★ 「指導と評価の一体化」とは・・・

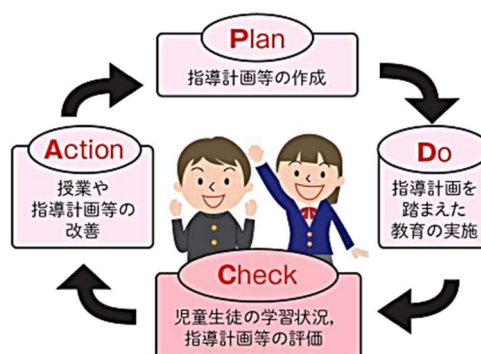
学校においては、計画、実践、評価という一連の活動が繰り返されながら、児童生徒のよりよい成長を目指した指導が展開されています。すなわち、指導と評価とは別物ではなく、評価の結果によって後の指導を改善し、さらに新しい指導の成果を再度評価するという、指導に生かす評価を充実させることが重要です。このことを「指導と評価の一体化」と言います。

【学習評価の基本的な考え方】

- 「児童生徒にどういった力が身についたか」学習の成果を的確に捉える
- 教師が指導の改善を図る
- 児童生徒自身が自らの学習を振り返り、次につなげる
- 授業改善を進める上でも、学習評価を中核にPDCAサイクルを確立し、児童生徒一人一人の学習の成立を促す

★ 「指導と評価の一体化」を進めるために・・・

このような「指導と評価の一体化」を進めるためには、評価活動を評価のための評価に終わらせることなく、指導の改善に生かすことによって指導の質を高めることが一層重要となります。また、学習の評価を、日常的に、通信簿や面談などを通じて、児童生徒や保護者に十分説明し、児童生徒や保護者と共有することなども大切です。



【参考】学習評価の在り方ハンドブック.文科省
国立教育政策研究所,2020.

★ 評価のタイミング

子どもの学習状況の把握には、異なる方法や様々な評価者による多様な評価を組み合わせるとともに、評価を学習活動の終末だけでなく、事前や途中に位置付けて実施することを心掛けましょう。(机間指導における評価は、p.32 参照)



【参考】学習評価の在り方
ハンドブック.文科省国立
教育政策研究所,2020.



評価問題だけでなく、ノートや作品からも子どもたちのよさや成長をたくさん見取れます。適宜、コメントを書いたり、声をかけたいしましょう。

3 授業を充実させるポイント

(1) やる気に満ちた熱中する授業を作りましょう

★ 教師にとって、子どもがやる気に満ち、熱中して活動する充実した授業は、目指す理想像です。

【熱中する授業の6つの要素】

- | | |
|---------------|-------------------------------|
| ① 知的な授業 | ④ 「できない状態」から「できる状態」になる授業 |
| ② ゲームの要素がある授業 | ⑤ 自分で考え、自分で練り上げていく授業 |
| ③ 頭・心・体が動く授業 | ⑥ やることがはっきりしていて、全体の進行状況がわかる授業 |



このような授業をするために、十分な教材研究と、基本スキルを身につけましょう。

(2) 当たり前の時間感覚を大切にしましょう

★ どんなに工夫した授業をしても、教師の時間感覚がいい加減だと、子どもたちの授業への集中力は切れてしまいます。

【授業での3つの時間感覚】

- ① 開始時刻と同時に授業が始まる。
- ② 授業進度の時間管理に気を配り、メリハリをつける。
- ③ 時間通りに授業が終わる。



(3) 分かりやすい発問を工夫しましょう

★ 明確で意図的な発問を準備しましょう。特に最初の発問（初発問）は大切です！



【発問3つのポイント】

- ① 最初の発問が分かりやすく、活動しやすい。
- ② 意図的で、無駄な発問がない。
- ③ 発問が、意図を持って組み立てられている。

【発問のねらい】

導入

- 学習経験（興味・関心・体験など）を調べるための発問
- 復習のための発問
- 興味・関心、問題意識を高めるための発問

展開

- 課題をつかませるための発問
- ヒントや手掛かりを与えるための発問
- 矛盾、対立、葛藤を生むための発問
- 発想の転換を図るための発問
- イメージを広げる発問
- 多様な考えを引き出すための発問

終末

- 問題整理のための発問
- 抽象化、一般化のための発問
- 定着、練習のための発問
- 評価のための発問

【よい発問の条件】

明確な「問い」であること

- ☐ 意味や問いの方向性は明確か？

計画的・意図的であること

- ☐ 発問が学習の流れに沿って計画されているか？

興味・意欲を呼び起こすものであること

- ☐ 考えようとする意欲を呼び起こすものであるか？

子どもの実態に合っていること

- ☐ 一人ひとりへの配慮がある発問か？

タイムリーであること

- ☐ 機をとらえた発問か？

※ 工夫された発問でも、機を逸すると効果は半減します。

★ 沈黙が、問いかけよりも子どもの思考を促すこともあります。

発問した後、子どもからの反応がないと心配になり、更に続けて、問いかけてしまうことはありませんか？しかし、子どもは教師が話しかけている間は考えないものです。そこで「間」を生かすことが大切になります。

★ 発問をより効果的にするテクニック



【授業のテクニック】

- 「間」が子どもの緊張感と、考えることの必要性を高める
- 考えさせるには、そのための時間を保障することが大切
- 授業に緩急をつける

【話す内容以上に子どもたちに語りかけるもの】

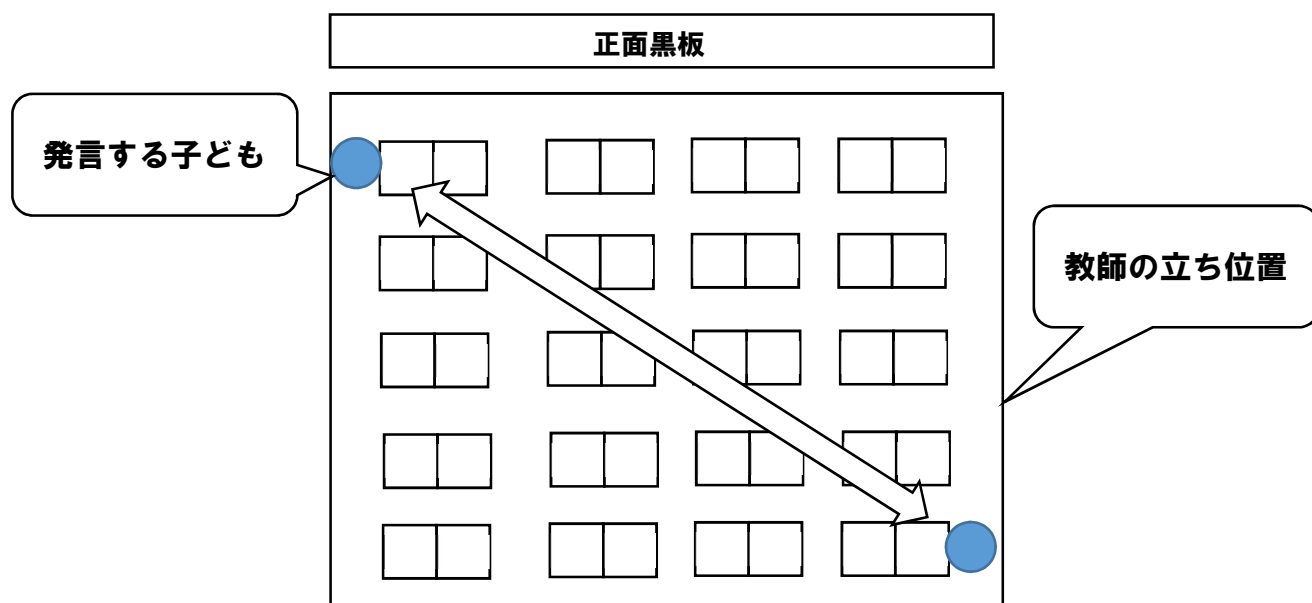
- 子どもたちに話を聞く準備をさせる
子どもたちの目・手・姿勢
- 聞き取りやすい声の大きさ
通常の話し声よりは大きく
- 話すスピード・抑揚
普段よりややゆっくり、抑揚をつけて
- 表情・ジェスチャー
いきいきとした表情、場合によっては身振り手振り
- 板書や資料を示しながら話す
言葉だけでなく、資料や写真などと関連させて



【子どもたちを注目させるために】

- ① 小さな声でゆっくりと話すと、子どもは一生懸命聞こうとする
こちらの思い入れが大きいところでは、声も大きく、早口になりがちなので気をつける。
- ② 声に出さずに問う
ジェスチャーや無言の動作は、子どもの集中力を高める。
- ③ 立ち位置を工夫する
相手に伝わる声で発表させたいときや、発表内容をより全体で共有させたいときは、子どもから離れるのも効果的。黒板の前にはばかりいるのではなく、発言する子どもに対して教室の反対側に立ったり、教室の後ろ側に立ったり、子どもの実態に合わせて変化させる。





授業中の教師の立ち位置を工夫することは、指導力アップのポイントです。

(4) 間違いを楽しみ、「深い学び」が生まれる教室にしましょう

★ 子どもどうしの意見交流が、自分を振り返り、理解をより確かなものにします。



【子どもが自分の意見を発言しにくい授業を改善するには】

- 間違いを楽しむ教室の雰囲気づくり
- 子どもの心をつかむ教材の工夫
- あっと言わせる教材提示の仕方
- 時には笑いを引き出す話術も
- 子どもの「知りたい」を引き出す工夫

(参考：蒔田晋治、教室はまちがうところだ、子どもの未来社、2004.)

★ ポイントとなる場面では、教師の意図的な失敗も効果的

先生が困っている状況

「あれ、先生も分からないみたいだぞ。」

先生がわざと間違える

「先生、その答え、間違っています。」など



【子どもの誤答に対しては】

- 「正しい」「間違い」だけに話題を焦点化しないようにする。
- その論理に共感してみる。

「なるほど、この考えに説得力があるね。」

その上で、誤答から学ぶという姿勢を大切にする。子どもの心をつかむ教材の工夫

- 貴重な考えを出してくれたことに感謝する。



point

子どもに気づかせる場を意図的に作ることで、説明したくなる意欲をかきたてる。また、「子どもが先生役」「先生が子どもの立場」になる機会をつくる。

★ 40 人の子どもがいれば 40 通りの考え方があります

正解にも間違いにも、その子どもなりの論理があります。その考え方を知り、どのような手立てを講じるのかを考えていくことを「誤答分析」といいます。

授業の達人は、よく誤答分析の達人でもあると言われる。子どもたちの予想される反応とそれに対する適切な対応を準備できるからです。反対に、予期せぬ子どもの反応に動揺して、いい加減な対応をしてしまうと、子どもの信頼を失いかねませんので、気を付けましょう。

(5) 熱心な話し合い・学び合いでお互いに高め合う授業をつくりましょう

【話し合い・学び合いの意義】

- より主体的な態度を身に付けることができる。
- 自分の考えをより確かなものにすることができる。
- 相互に刺激し合い、思考を活発にすることができる。
- 新しいものの見方や考え方を作り出すことができる。
- 集団として創造的な活動をすることができる。



ICT

それぞれの考えや意見を効果的に共有！

※ 子ども達1人1人の考えや意見を、リアルタイムで共有することで、考えが深まります。

【話し合い・学び合いにおける支援の仕方】

発言が一部の子どもに偏り、一人一人に深まりが見られない

- 話し合いを踏まえ、一人一人が考えをまとめる時間を設け、意図的な指名を行う。

焦点があいまい。深化・発展の糸口が見えない

- 本題が何であるかを押さえたり、それまでの議論を整理したりする。
- 発想や場面を変えた助言をする。

話し合いがうまく進まない

- 話し合いのゴールを明確にし、担当の子どもたちと事前に打ち合わせをする。

意見をうまく表現できなかったり、意見を言えなかったりする子どもがいる

- 機会をとらえて、子どもの考えを聴く。
- 話し合いの良さや大切さを伝える。

【留意点】

- 助言が頻繁で、話し合いを分断することにならないようにする。
- 話し合いに過度に完全さを求めない。
- 大勢の子どもから意見が出るような指導・助言を心掛ける。
- 「話し合ったこと」が意味のあることと実感できるような指導・助言を心掛ける。
- 「話し合い」を通して、その方法や意義を教え育てるという心構えを持つ。



(6) タイムリーな助言で子どもを支援しましょう

★ できるだけ自力解決または集団解決するために援助し、子どもと共に考えるというスタンスを大切にしましょう。

問題点を分析する

「分かっていることは何だろう。」

「今考えることは何かな。」

「図（表）に表して整理できないだろうか。」

新たな視点から問題にアプローチする方法を考えてみる

「もし、～だったらどのようなになるだろうね。」

「この方向から考えることができそうだね。」



★ 友だちの考え方をヒントにする場面を作りましょう。

問題が解決してから発表させるより、むしろ思考・判断の途中の段階で発表させる

自力解決にこだわる、他の考えに依存しようとする、など多様な子どもがいるので、そのタイミングには注意が必要。

「〇〇さんの考えと◇◇さんの考えからは～ということが言えそうだね。」

「このように考えると、～はどうなるのだろうか。」

グループ活動の場面を設け、話し合いを活性化させる問いも有効

「AグループとBグループの似ている部分、異なる部分は何かな。」

異質・同質のグループ編成を工夫し、生かすことも有効。



point

子どもがつまづいた時に、すぐにヒントや助言を与えてしまうのではなく、ヒントを含んだ課題提示・環境づくりなど、子どもが自ら問題の解決の糸口に気づくことができるような配慮が必要です。

★ タイムリーな指導・援助には事前の準備が不可欠です。（教材研究の充実）

【事前準備のポイント】

- 予想される子どもたちの反応を類型化しておく。
- 反応の根拠となる部分の分析と、その分析に基づいた支援を準備しておく。
- 日頃の子どもの反応の傾向をもとに、意図的な指名の準備をしておく。



point

学年や教科の枠を越えて、小さなことから考えが深まる助言の在り方などを議論しましょう。

(7) がんばった道筋が見える板書にしましょう

★ 音声は消えるが、板書は残る。「残る」・「見える」ことを最大限生かしましょう。



【板書の意義】

音声言語の補助手段

- 正確かつ明瞭に伝達することが可能
- 留意点を活動中も意識させ続けることが可能

集団思考の形成機能

- ねらいの共有化、課題の明確化
- 比較や概念の関連付けなど思考のヒント
- 子どもの思考に沿った加除訂正

理解・定着機能

- 概念や知識の整理や構造化
- 学びの流れ、概念や知識の習得過程を振り返る手立て

★ 板書とノート指導を連動させることで、ノートが子どもたちの学習に役立つものになります。子どものノートをイメージして、板書を考えましょう。

【よい板書を目指して！】

板書の基本

- 楷書で、正確に丁寧に！
- 学年や実態に合った漢字を使用！
- 文字の大きさは、一般的には12cm 四方！
- 見えやすく！照明や日光、文字の色や囲み、色の見え方に困難を感じている子どもへの配慮を！
- 消し方にもひと工夫、要点のみ残して焦点化を！

子どもの思考の活用

- 子どもの考えや方法を、授業で生かすことが重要
- ロイロノートで意見を集約したり、カードや小ボードに記入させ、発表させた後、提示したりするなど、全体で共有する工夫をしましょう。

子どもと共に創り上げる板書

- 子どもを黒板の前で活躍させる。
- できるだけ子どもの言葉を活用する。
- 板書内容、書くタイミングを計画する。



★ 繰り返し学び直す仕掛けをつくりましょう

授業中に表出した子どもの考えや方法などの板書内容を、教室やホール等に掲示して、以後の学習に活用する取組が実践されています。

板書はその時間で消えてしまいますが、この方法により、単元を通しての活用も可能になります。

板書の写真をタブレットで撮影し、次時の導入に活用したり、教職員間で共有したりすることで、授業改善へ！



【板書のルール（例）】

- 本時の「課題」「めあて」を明示する。
- 「課題」「めあて」に対する、本時の「まとめ」を授業の終末に明示する。
終末の「まとめ」に結び付くよう、授業を逆算して組み立て、授業の流れ・導入・「めあて」「課題」を考える。
- 子どもたちの考えの提示は、小ボード等を利用する。
全校で統一した黒板プレート（「課題」「めあて」「まとめ」など）を使う。また、文字の大きさや色チョーク、記号・マーク等の使い方を工夫する。

チョークの基本（例）

★赤チョーク

■青チョーク

◎黄チョーク

★マークを書いて、課題（めあて）を囲む。

■マークを書いて、まとめを囲む。

見えにくいので、文字には使わない。

◎マークを書いて、キーワードなどを示すときに使う。

- ※ ここで示しているのは、あくまで例です。児童・生徒の実態に合わせて、色と記号を組み合わせるなど、調整してください。
- ※ 赤や青は視認性が低いので、他の色を用いる等配慮してください。ここでは、学校にある一般的な色として例示しています。

★ 各教科の板書例

【例 算数、数学の板書】

日付 ○月 ○日(○)	
★めあて ○○○○について、○○○○を考えよう。	子どもたちの考え
問題・課題 1つの辺が...	
見通し	■まとめ ○○○○は、○○○○することで求めることができる。
	練習問題
	振り返り ※観点を示す

【例 国語の板書】

日付 ○月 ○日(○)	
作品名・題材 ○○○○○○ 作者・筆者 ○○○○	★めあて 山場の前と後で、○○○○の思いの変化をとらえよう。
振り返り ※観点を示す	情景描写
■まとめ ○○○○という思いに変わったことがわかる。	思い
後	山場
前	

【例 社会の板書】

日付 ○月 ○日(○)	
★めあて ○○○○について、理解しよう。	資料②
課題 ○○○○が起きたことは、その後の国際情勢にどのような影響を与えたのだろうか。	資料③
写真A	資料①
※子どもたちの発見や考え	※子どもたちの考え
	■まとめ ○○○○が起きたことで、○○という影響を与えることになった。つまり、○○○○は●●である
	振り返り ※観点を示す

【例 理科の板書】

日付 ○月 ○日(○)		★めあて ○○○の性質について調べよう。		結果	
課題 ○○○になると出てくる大きな○○の正体は、何なのだろうか。					
予想 ※子どもたちの予想や考え					
実験		図①		考察	
※実験の流れ				※子どもたちの考え	
		図②		■まとめ	
				○○○○は、○○○○が変化したものといえる。	
				振り返り ※観点を示す	

※ ここに示しているものは（例）ですので、各校の実態に応じて調整してください。

※ 各教科の板書については、教科の特性に合わせた工夫が必要です。

（８） 丁寧なノート指導をしましょう

★ ノート指導は、「子どもをよく見ること」「見えないところを見ること」につながります。

【ノートの意義】

子どもの立場では・・・

- 学習の理解が深まり、定着に役立つ。
- 考えが広まったり、深まったりする。
- 自分の考えが整理され、説明するときにも役立つ。
- 復習時の参考書や資料として活用できる。（学びの連続性）
- 自己評価ができる。

教師の立場では・・・

- 子どもの学習状況を把握し、効果的に学習を進めることができる。
- 子どもとの良好な人間関係の構築に役立てることができる。



★ 書くことが遅い子どもへの支援、早い子どもへの対応について

「書くことが遅い子どもを待っていると、早く書き終わった子どもが遊んでしまうし、かといって遅い子どもを置いていけないし・・・。」

子どもによって書くスピードは異なります。その差が大きくならないように、日頃から子ども一人一人の実態を把握し、手だてを含めた授業を組み立てていくことが大切です。

【ノート指導での支援・対応（例）】

書くことが遅い子どもへの支援（例）

- 書き始めが遅れていることがあるので、注意を喚起する。
- 書くことが極端に遅い子どもには、ノートに赤鉛筆で薄く書いてあげたり、見本を提示したり、作業量を調節したりする。
(できたら褒めること！)

早く書き終えた子どもへの対応（例）

- 別の解決方法を考えさせる。
- 発表準備をさせる。
- 板書をさせる。 等

※ ここに示しているものは（例）ですので、子どもの実態に応じて調整してください。

★ ノート指導は、板書と連動させることがポイントです。

【よいノート指導を目指して！】

ノート指導の基本

- 子どもの発達段階に適したノートを準備する。(マス目の大小、罫線のみ等)
- 必ず記入する事項を明確にする。
 - ▶学習日時 ▶めあて
 - ▶考え（自他） ▶振り返り 等
- ノートガイダンスを実施する。
- 書く内容や書き方のルール等を確認
- 小学2年生以上は、基本的に見開き2ページを利用することが望ましい。
(小学1年生は1ページも可)

子どもの思考を表現するために

- めあてや学習課題等は赤ペンで囲む。
- 間違い直しは、消しゴムで消さずに、近くに訂正を記入させる。
- 自分の考えの表現方法は、
 - 【1・2年生】絵、言葉
 - 【3・4年生】絵、図、線分図、言葉
 - 【5・6年生及び中学生】絵、図、線分図、数直線、言葉、式、思考ツールの活用 など

※ 上記は目安として示しているが、子ども一人一人の発達段階や理解度に応じて対応することが望ましい。

※ 小学校高学年以降は、自分の工夫を書き込んで、自分なりの参考書となるようなノート指導を心がけましょう。

※ 授業でのノート指導が、「内容を整理する力」「まとめる力」等を育て、それらが家庭学習ノートへとつながるようにしましょう。

※ 小中の連携で、継続したノート指導の実現に結び付けましょう。

(9) 意図的な机間指導をしましょう

★ 机間指導は、1人ひとりの学びを保障し、授業を活性化するための時間です。

【机間指導の意義】

クラス全体の学習状況を把握

- 学習に集中しているか。
- 課題の意味を理解しているか。
- 時間はどの程度かかりそうか。

指名・練り合いのプランニング、指導プランの修正

- 意図的な指名で進める際には、その順番はどうしたら効果的か考える。
- 自由発言で進める場合、ぜひ取り上げたい考えはどれかを選ぶ。
- 場合によっては、机間指導しながら、発表者を指名（声かけ）しておく。

個々の子どもの学習状況の把握（指導と評価の一体化）

- 評価規準に基づき、「努力を要する」と判断される子どもへの手だてを講じる。
- 「学習の高まり、深まり」の見られる子どもへは、次なる思考を促す声かけを行う。
- 「主体的に学習に取り組む態度」「思考・判断・表現」については、机間指導時に学習状況をつかむ。



宝探しのつもりで、机間指導を行う！良い考え・意見等を見つけてクラス全体へ伝えることで、思考が滞っている子どもへのヒントになります。

【机間指導のポイント】

机間指導は個別指導のチャンス

- 支援の手立ては事前に準備しておく。
- 助言は3回に分けるぐらいの気持ちで支援を行う。
- 特定の子どもだけにつきっきりにならないようにし、できるだけ多くの子どもに声をかけるようにする。(ただし、本時で特に支援を手厚くする子どもを設定することもあり得る。)

評価のチャンス

- 丸付けをしたり、コメントを書いたりし、子どもの良さを評価する。
- 取組状況を適切に見取り、個に応じた声かけをする。
- 知識・技能だけでなく、どのように学習に取り組んでいるのか、主体的に学習に取り組む態度についても見取る。

チーム・ティーチング(TT)においては

- 本時のねらいを確認する。
- 授業で子どもがどのような力を付けて、最終的にどのような姿になればいいのか、イメージを共有する。
- それぞれの役割を明確にする。
- 机間指導においても、特別な支援を要する子どもへの対応、担当する指導場面などの分担等を明確にする。
- 授業内での子どもの気持ちに添った発言や役割交代も効果的！
- 授業の流れを分析し、T2の介入の場面を意図的に設定する。

座席表の活用

- 一人一人の子どもの学習状況を把握し、指導に役立てるために、座席表の活用が効果的。ただし、座席表への記入が目的化しないように。また、記号を工夫するなど、簡略化する。
- TTでは相互に情報を交換しやすいよう、共通の視点で行う。
T1、T2のコンビネーションも大切。

第5章

「家庭学習」で個別最適な学びの実現 〈子どもたちに生涯学び続ける力をつけるために〉

1 家庭学習ノートの意義

家庭学習は、生涯にわたって学ぶ姿勢の基礎をつくるものです。子どもたちに自分で課題を見つけさせ、主体的に学ぶ姿勢を育みましょう。

【家庭学習ノート（自主学習ノート）の意義】

■ 学習習慣が身に付きます。

続けることで、家でもノートを開いて学習することが当たり前になっていきます。習慣は一朝一夕では身に付きません。継続することが大切です。

■ 自分にあった学習内容を選択することで、学習に対して主体的になるとともに、学力が向上します。

学校で学習しただけでは、そのとき理解はできていてもすぐに忘れてしまいます。繰り返し練習したり復習したりすることで、確かな力になります。

また、何をやるか自分で決めて取り組むことの繰り返しで、自分の学びを調整する力が身に付きます。

■ 適宜「振り返り」をしながら進めることで、「学び方」を学べます。

家庭学習に挑戦しながら、そのつど振り返り、少しずつ改善しながら、自分に合った学び方を身につけることができます。

■ 学ぶことが楽しくなります。

自ら選択し、より主体的に関わる自主学習に挑戦することで、学ぶことが楽しくなります。

■ 子ども、家庭、学校をつなぎます。

子どものノートを見たり、声をかけたりすることで、コミュニケーションが生まれます。

★ 家庭学習ノート（自主学習ノート）は、子どもも教師も成長できる取組

【目指す子ども像】

- ① 自ら学ぼうとする子
- ② 深く考えたり、工夫できる子
- ③ 学習の計画が作れる子
- ④ 家庭学習を続けられる子
- ⑤ 友だちと一緒に学ぼうとする子
- ⑥ 自分が好きで、あきらめない子
- ⑦ 勉強を楽しんでいる子

【目指す教師像】

- ① 信じて待つ教師
- ② 選択肢を用意する教師
- ③ ヒントを与える教師
- ④ どの子どもできるように心がける教師
- ⑤ 子ども同士の学びをつなぐ教師
- ⑥ 温かい言葉をかけ、励ます教師
- ⑦ 成長と一緒に喜ぶ教師

〔参考：伊垣尚人，自主学習ノートの作り方，ナツメ社，2012.〕

2 家庭学習ノートの取組

【家庭学習ノートの取り組み方】

- ① 小学1年生の夏休み頃から、徐々に自主的に行う家庭学習に取り組んでいきましょう。

- ② 週1回程度からスタートしましょう。

中学生は、学校からの課題を1ページ、自分で取組をする課題を1ページとするなど量を設定したり、40分間、50分間と時間を設定したりするなど、子どもたちの実態に応じて取組を進めましょう。

※ 見開き2ページを基本としましょう。

※ 取り組んできたことをほめ、認め、励ましながら、自分の課題に応じた家庭学習に取り組むことができるよう、助言しましょう。



子ども一人一人とのかかわりを大切に、信頼関係を構築することにつながる
ことが大切です。家庭学習ノートは、教員のコメントを書いて返却するようにしま
しょう。サインやスタンプだけで終わるときも、内容を読んだ感想等を伝えたいし
て返却するようにしましょう。



【家庭との連携・協力】

家庭学習の手引き等を活用し、家庭への連携・協力を求めましょう。

■ 時間の確保

各家庭で話し合い、習慣づけとなるような時間設定をしてください。

■ 環境づくり

ながら勉強（テレビを見ながら、お菓子を食べながら、音楽を聴きながら…）では、効果が上がりません。落ち着いた環境で学習できるように工夫をお願いします。

■ 見届け・励まし

お子さんがやる気をもてるような声かけをお願いします。おうちの人コメントを書いたり、スタンプを押してあげたりすることもいいことだと思います。

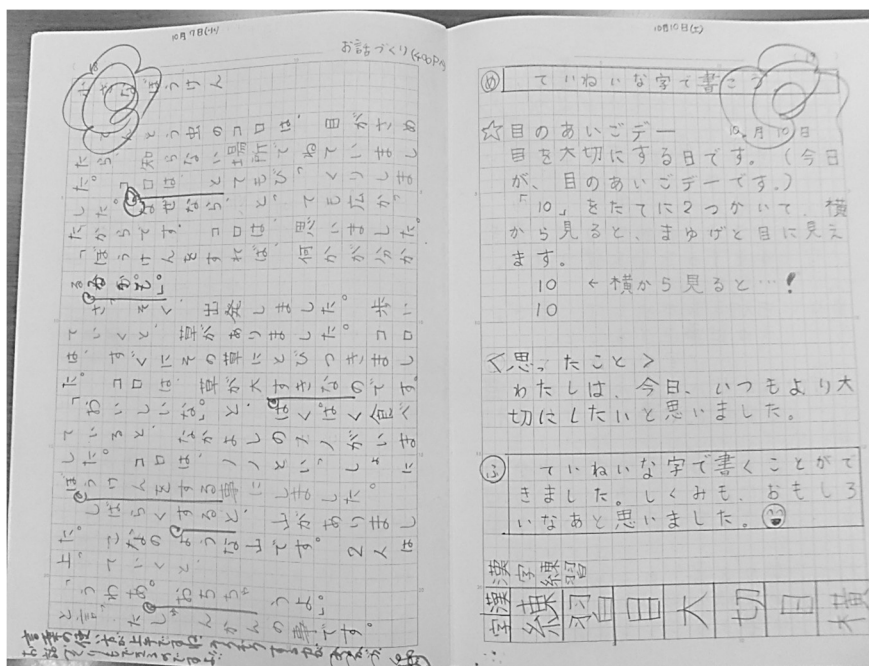
夏休み等の長期休業中の家庭学習ノートについては、花丸やスタンプ等を使い、最後のページにコメントを書くようにしましょう。その際も、「たくさんあるから、最後のページにまとめてコメントを書いたよ。」と子どもに伝えるなど、子どもたちの気持ちに寄り添った関わりを大切にしましょう。



point

子どもも教師も無理なく長く続くようにすることが大切です！

★ 秋田市の子どもの家庭学習ノート（自主学習ノート）【例】



家庭学習ノートでも「めあて」や「ふりかえり」が書けるよう、指導しましょう。



point

【参考】 寝屋川市 家庭での生活習慣リーフレット



小学校版



中学校版

【参考】 寝屋川市小学校の事例

【市事例① 自主学習ノートのすすめ】

「校長室前掲示板を活用した自主学習ノートへの意欲向上」

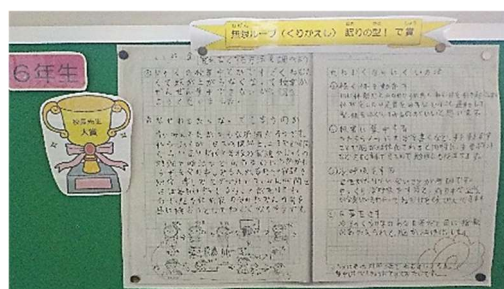
学校全体で「家庭学習のすすめ」と「自主学習ノートのススメ」等の掲示物や配布物を作成し、どの学年でも取り組みやすいよう工夫されていました。

取組

- 3～6年生が自主学習ノートに取り組み、週1回提出
- 家庭学習ノートを各クラスや各学年廊下等で掲示
- 毎月各クラス1名の家庭学習ノートをA3サイズでカラーコピーをして、校長室前掲示板に掲示。それを、校長先生と教頭先生に見てもらい、掲示された全ての家庭学習ノートに「〇〇賞」とつけ、その中から更に「校長賞・教頭賞」を選定



校長室前掲示板



校長賞



教室前掲示

各クラスの児童の家庭学習ノートを全校児童が見ることで、「こんな家庭学習ノートをやってみよう」と刺激を受けて、意欲的に取り組む子どもたちが増えてきたそうです。



【市事例② 自主学習グランプリ】

「自主学習ノートに継続して取り組んだ一人の児童の変化」

この学級では、自主的に学ぶ力を育成するため、家庭学習ノートの取組が行われていました。担任の先生は、令和元年10月末に秋田訪問に参加され、現地で学ばれたことを生かして、11月から自主学習グランプリに取り組まれました。写真は、一人の児童の家庭学習の変化を追ったものです。先生の丁寧なご指導もあり、児童の自主学習の内容が、明らかに改善しているのが見て取れます。初めは授業時間を使って指導、その後自主学習へ移行しています。

取組

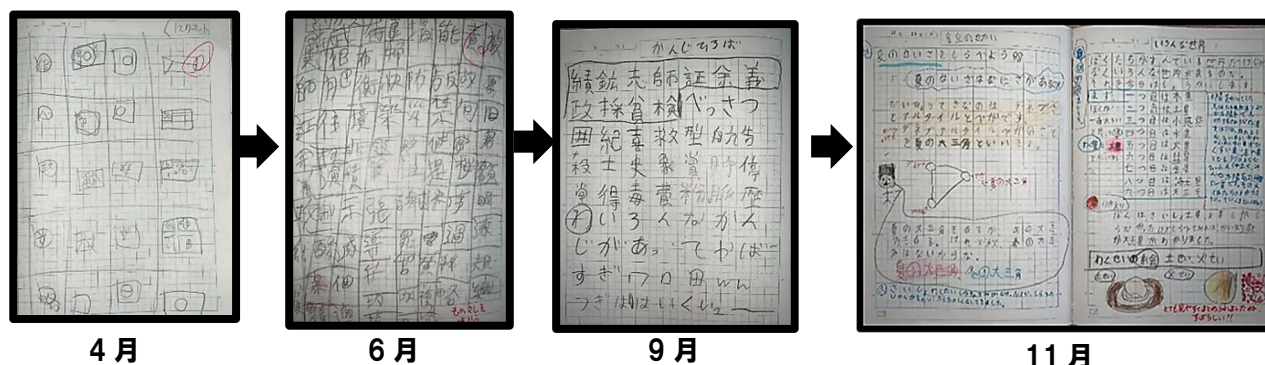
- 内容は自由とし、時間は45分間で、ノート見開き2ページを使用
- 「めあて」「振り返り」を必ず書く
- 良かったものは表彰・掲示する

評価の観点

- ① まとめ方（見やすいまとめになっているか）
- ② ていねいな字（初めから終わりまで）
- ③ オリジナリティ（教科書などの写しではなく、自分の言葉でまとめられているか）

採点・表彰（教師が採点）

- 点数の高かった児童を表彰しました。（金賞・銀賞・銅賞）
- 入賞者の良かったところを一人ずつ、ノートを電子黒板に写しながら、説明するのがポイント。



自主学習ノートを継続していくことで、努力や成長が「見える化」されます。

「見える化」することで、努力や成長を本人・教師・保護者で共有することができます。

また本人の自信にもつながります。



「中学校区での家庭学習の取組を共有し合う校内掲示板」

校種を越えて、家庭学習を交流するために、校区の小中学校の家庭学習を掲示しています。

小学校同士で見合うことで、お互いに高め合うことにつながるとともに、中学生の家庭学習を小学校に掲示することで、小学生はこういうノートを作ればいいのかと学ぶことができます。

そのような、校種を越えた子どもたち同士がブラッシュアップできるような仕組みを構築しています。

巻末資料①「寝屋川市ユニバーサルデザインの授業づくりシート」

ユニバーサルデザインの授業づくり			
環境整備・共通認識	1	教室の学級文庫、ロッカーの中、机イスの整理整頓ができているか？ゴミはおちていないか？	
	2	掲示物・装飾などが、気が散らないよう工夫しているか？	
	3	黒板周りが整理できていて、見やすいか？（黒板がきれいに消えているか）	
	4	先生のものを勝手にさわらせていないか？（「私物」と「公共のもの」の区別ができているか）	
	5	友だちどうしの助け合い（アドバイス）になっているか、注意のし合いになっていないか？	
	6	トイレに行きたくなかった子の指導は適切か？	
授業の流れの中で	7	時間どおりに始められているか？	
	8	授業に遅れてきた子どもの指導は適切か？	
	9	時間の初めに、この時間のねらいと流れを明確にしているか？	
	10	準備物を出すタイミングは適切か？	
	11	授業の導入に工夫を凝らしているか？	
	12	忘れ物をした子どもの指導は適切か？	
	13	1回の指示は短いか？	
	14	指示は静かになってから出しているか？	
	15	指示は数字などがあり具体的か？	
	16	指示は肯定的表現を使っているか？	
	17	指示ができたかどうかを確認しているか（やらせきっているか）？	
	18	課題を始めるとき、何をどれだけすればいいかを具体的に指示しているか？	
	19	早くできた子どもが飽きないように、何かを工夫しているか？	
	20	失敗が起こらないように工夫をしているか？失敗しても大丈夫な工夫をしているか？	
授業の内容・技法	21	片づけを授業時間に、みんなでやる工夫をして、やらせきらせているか？	
	22	まとめをして、次の授業の予告をしているか？	
	23	時間どおりに終わっているか？	
	24	15分ごとをめやすに内容や活動形式を変化させているか？	
	25	何か身体を動かす活動を取り入れているか？	
	26	空白の時間ができていないか、子どもを待たせていないか？	
	27	授業中の声に、トーンの変化や緩急、強弱などがあるか？	
	28	授業の中に、緊張感を持たせる場面がちりばめられているか？	
	29	子どもから出てきたものに、すぐその場で評価しているか？	
	30	普段できていない適切な行動ができているとき、必ずほめているか？	
	31	視覚情報を使ったり、楽しい小道具を使ったりしているか（パソコンの活用を含む）？	
	32	順番に積み重ねて全体を説明したり、まとめから細部を説明したりしているか？	
	33	授業に子どもの見通しとなるくらいの型（パターン）があるか？	
	34	その中でも、変化を持ち込んで、子どもを飽きさせていないか（ゲーム的要素、グループ活動）？	
	35	板書の量は適切か、大事なところが目立っているか（色分けやアンダーラインなど）？	
	36	視覚情報と聴覚情報は同量になっているか？	
	37	ノートを写すのに時間がかかる子どもに、配慮・工夫しているか？	

巻末資料② 「幼児期の終わりまでに育ってほしい 10 の姿」

小学校に就学する子どもたちは、幼稚園・保育所・認定こども園・家庭などでの様々な体験や学習を経験し、「幼児期の終わりまでに育ってほしい 10 の姿」を育まれています。小学校 1 年生をゼロのスタートではないと意識することで、就学前教育からの学びを活かした小学校教育が展開され、子どもたちのよりよい成長へとつながります。

①健康な心と体	幼稚園生活の中で、充実感をもって自分のやりたいことに向かって心と体を十分に働かせ、見通しをもって行動し、自ら健康で安全な生活をつくり出すようになる。
②自立心	身近な環境に主体的に関わり様々な活動を楽しむ中で、しなければならないことを自覚し、自分の力で行うために考えたり、工夫したりしながら、諦めずにやり遂げることで達成感を味わい、自信をもって行動するようになる。
③協同性	友達と関わる中で、互いの思いや考えなどを共有し、共通の目的の実現に向けて、考えたり、工夫したり、協力したりし、充実感をもってやり遂げるようになる。
④道徳性・規範意識の芽生え	友達と様々な体験を重ねる中で、してよいことや悪いことが分かり、自分の行動を振り返ったり、友達の気持ちに共感したりし、相手の立場に立って行動するようになる。また、きまりを守る必要性が分かり、自分の気持ちを調整し、友達と折り合いを付けながら、きまりをつくったり、守ったりするようになる。
⑤社会生活との関わり	家族を大切にしようとする気持ちをもつとともに、地域の身近な人と触れ合う中で、人との様々な関わり方に気づき、相手の気持ちを考えて関わり、自分が役に立つ喜びを感じ、地域に親しみをもつようになる。また、幼稚園内外の様々な環境に関わる中で、遊びや生活に必要な情報を取り入れ、情報に基づき判断したり、情報を伝え合ったり活用したりするなど、情報を役立てながら活動するようになるとともに、公共の施設を大切に利用するなどして、社会とのつながりなどを意識するようになる。
⑥思考力の芽生え	身近な事象に積極的に関わる中で、物の性質や仕組みなどを感じ取ったり、気付いたりし、考えたり、予想したり、工夫したりするなど、多様な関わりを楽しむようになる。また、友達の様々な考えに触れる中で、自分と異なる考えがあることに気づき、自ら判断したり、考え直したりするなど、新しい考えを生み出す喜びを味わいながら、自分の考えをよりよいものにするようになる。
⑦自然との関わり・生命尊重	自然に触れて感動する体験を通して、自然の変化などを感じ取り、好奇心や探究心をもって考え言葉などで表現しながら、身近な事象への関心が高まるとともに、自然への愛情や畏敬の念をもつようになる。また、身近な動植物に心を動かされる中で、生命の不思議さや尊さに気づき、身近な動植物への接し方を考え、命あるものとしてのいたわり、大切にすることを覚えるようになる。
⑧数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚	遊びや生活の中で、数量や図形、標識や文字などに親しむ体験を重ねたり、標識や文字の役割に気付いたりし、自らの必要感に基づきこれらを活用し、興味や関心、感覚をもつようになる。
⑨言葉による伝え合い	先生や友達と心を通わせる中で、絵本や物語などに親しみながら、豊かな言葉や表現を身に付け、経験したことや考えたことなどを言葉で伝えたり、相手の話を注意して聞いたりし、言葉による伝え合いを楽しむようになる。
⑩豊かな感性と表現	心を動かす出来事などに触れ感性を働かせる中で、様々な素材の特徴や表現の仕方などに気づき、感じたことや考えたことを自分で表現したり、友達同士で表現する過程を楽しんだりし、表現する喜びを味わい、意欲をもつようになる。

〔参考：幼稚園教育要領、幼保連携型認定こども園教育・保育要領、保育所保育指針〕

巻末資料③

ねやがわスタンダード セルフチェックシート

本シートは、ご自身のスキルアップのためにご活用ください。

項目	1 学期	2 学期	3 学期
1 「日々の指導」			
笑顔で子どもたちに接していますか			
挨拶・返事・靴揃え等、基本的な生活習慣の指導を大切にしていますか			
学校全体で教室のルールやレイアウトについて話し合い、共有していますか			
2 「探究型」の「ねやがわ授業スタイル」			
学習の流れについて、校内で共有し、統一された指導が行われていますか			
子どもたちのやる気を引き出す工夫をしましたか			
当り前の時間感覚を大切にしていますか			
分かりやすい発問を工夫していますか			
間違いを楽しむことができるような雰囲気を作り出す工夫をしていますか			
熱心な話し合い、学び合いのある授業をつくるための支援をしていますか			
タイムリーな助言で子どもを支援していますか			
授業の道筋が見える板書をこころがけていますか			
丁寧なノート指導を行っていますか			
意図的な机間指導をこころがけていますか			
3 「家庭学習」で個別最適な学びの実現			
家庭学習ノートに取り組んでいますか			
授業と家庭学習を関連付けて行っていますか			
子どもたちが自己の成長を感じることが出来るよう工夫していますか。			
4 学び続ける教師			
授業を見てもらう機会を持ちましたか			
授業を見に行く機会を持ちましたか			
同僚からアドバイスを受ける機会がありましたか			
主体的な学びとなるよう工夫していますか			
5 すべての基盤となる「同僚性」			
同僚との日々のコミュニケーションを大切にしていますか			
日常的に子どもの情報共有をしていますか			
受容的・支持的・相互扶助的な同僚性がある職場となっていますか			

振り返り

今後のめあて

㊦ がいは

㊧ っぱり、子どもたちの幸せ

㊨ くしゅうルールや指導法を

㊩ きあいあいと話し合おう

